

## 主なる神は都の土台であり、全人間のいのちの泉である

一読にして、何の面白みのないような歌であるように思える。人は自分の思い出での場所、どこの県のどこの町を故郷と思うのだろうか？この詩では極端なほどのエルサレムへの執着が感じられる。私自身は 4 代目の「江戸っ子」ではあるが、基本的には「故郷喪失者」であり、土地に結びついた礼拝所や教会があるわけではない。北海道や九州、沖縄生まれの人はそれなりの思い入れがあるのだろう。敗戦処理の引き揚げ船から「富士山」が見えた時、帰還した兵士たちは泣いたという。博多も有名な引き揚げ港であったのだが…ヨハネ 4:21 には、「この山（サマリアのゲリジム山）でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」おあり、24 節「神は霊である。だから、神を礼拝する者は霊と真理（すなわちイエスの名）で礼拝しなければならない」の方がすっきりする。人は、民族、故郷や領土の執着や「境界」を超えられないのだろうか？ロシアのウクライナ侵攻戦争から 1 年が経つ。そして、英国の狡さによって発生しているパレスチナとイスラエルの継続する争い、エルサレム中心化（ダビデ王の政治による宗教利用と地方聖所「ヤコブのすべての住まいへの圧迫）の持つ諸問題などを考えざるをえない。

むろん、土地に、殊に流浪の民のゆえに「エルサレム」（神の約束）に執着する人の気持ちは、理解はできる。

### 1. シオン・エルサレム伝承

「聖なる山（複数）」（1 節）、「主が愛されるシオンの城壁」（2 節）、「神の都」（3 節）、「いと高き神御自身が固く定める」「諸国の民がこの都で生れた」（4-5 節）とシオンの山々とエルサレム神殿が神に由来していることを歌っている。

この歌に私はかなりの違和感を持ちながらも、敵対する国々も皆この都の出身であるという壮大な夢には驚かされる。ここでは、主なる神は、エルサレムの「住民台帳」を書いている書記官のようなイメージが登場している。

ラハブとは海の怪物でエジプトの異名である。かつてヘブライ人を奴隷とした超大国である。ヘブライ語原典の「バベル」は、バベルの塔で有名であり、イエスラエルを捕囚とした超大国バビロニアのことである。ペリシテは地中海から鉄器文化を持ち込んだヒッタイトであり、イスラエルの強敵であった。ティルスは、新約聖書時代はツロであるが、地中海沿岸の都市国家であり、強大であった。クシュはナイル河上流のたぶんエチオピアであろうと推測されている。これら強大国の民らが「この都（エルサレム）で生れた」（*zeh yullad šām, this was born there*）というのであるから歴史的にはハチャメチャであるが、

ここまで来ればもう壮大であると言えない。まあ、アブラハム以前の前史を語る創世記では皆、セム、ハム、ヤペテの子孫であるわけだが… ちなみに「人種」という用語は19世紀に米国で造られたらしい。

## 2. 天地万物の創造主への信仰

この詩の神（「主」2節）は、イスラエルの救済主に留まらず、全世界の創造神である。全世界の主要の民がエルサレルの出身であるという「神話」は世界の民を「併合」する、あるいは「統合する」というより、信仰の自由による「一致」という神話的ヴィジョンなのであろうか？イスラエルが拡大的に外に出ていくのではなく、エルサレムに諸国民が集まってくるのである。イザヤ 2:2 の終末論的ヴィジョンである。日本の「八紘一宇」のように日本民族が世界を統合するのではなく、神が一致を求めるのであり、信仰者はそのための「僕」にすぎないのであろう。

## 3. すべての源（複数）は神の中に

最後の節は、シオン・エルサレム伝承を超えて、創造主である神への賛美となっている。「歌う者も踊る者も共に言う/『わたしの源はすべてあなたの中にある』と」。これは民族・国家の「境」を超えた創造論的、普遍的な信仰の、「存在するもの」すべての根源である神への信仰であるようにも見える。ただしここでは「歌う者と楽器を演奏する者の両方すべて」であって、実際は、レビやコラの子らの聖歌隊、音楽隊のことなのであろうが…「あなたの中にある」も「わたしの諸源（ma'yānay、springs 飛ぶこと、活力、発生、春、泉）は」であるからコラ一族の起源は神にあるということなのかも知れない。すると6節までの敵対者を含む普遍性は少ししぼんでしまうことになる。あるいは神賛美の源は神にあるということのかも知れない。神が人の中に感謝と喜びと賛美の泉としてあるという方が良い。この方が新約聖書に根ざした信仰には良いと思う。

突然1節の「彼の基」（yəsūdātōw）は聖なる山々に、で始まる歌は壮大なヴィジョンではある。5節の「この人もかの人、人はすべてこの都で生れた」という普遍性が重要であろう。人間の本来の住むべき場は神が特別に選ばれた聖なる都なのである。そして、「ひとり、ひとり」すべての人がそこに招かれている。